

ウラジロチチコグサ類

農研機構植物防疫研究部門
浅井 元朗

チチコグサモドキ属 *Gamochaeta* Wedd. は南北アメリカに約 50 種記載され (Nesom 2006), そのうち数種が日本で確認されている。ウラジロチチコグサ (広義) は路傍や芝地など、踏みつけのある土地に生育し、国内では本州~九州に分布するとされる。葉身裏面に白い毛が密生することが和名の由来である。アメリカ大陸原産の外来種で、日本への侵入は 1970 年代とされ (清水 2003), それ以前の主要な日本の雑草図鑑「日本雑草図説」(笠原 1968), 「日本原色雑草図鑑」(沼田・吉沢 1975) とともに収録されていない。

従来ウラジロチチコグサと呼ばれていた分類群には形態の異なる 2 種が含まれていることが確認された (高橋 2019; 2020)。北

アメリカ原産の *Gamochaeta chionesthes* G.L.Nesom と南アメリカ原産の *Gamochaeta coarctata* (Willd.) Kerg. である。ウラジロチチコグサの和名がどちらの植物に用いられたのかが不明だったため、高橋 (2019) は前者に対してキタウラジロチチコグサ、後者にはミナミウラジロチチコグサの和名を用いた。後者の学名は *Gamochaeta americana* (Mill.) Wedd. のシノニムであるため、Ylist (米倉・梶田 2003-) では、これをウラジロチチコグサ (別名アメリカチチコグサ) としている。本稿では以下、YList の和名に従って両種の形態的特徴について解説する。

植物の国際的データデータベースである Plants of the World Online および GBIF によれば、キタウラジロチチコグサ *G. chionesthes* G.L.Nesom は合衆国南東部および南アメリカに分布に限られる。一方、ウラジロチチコグサ *G. americana* (Mill.) Wedd. は原産地である南アメリカのほか、合衆国南部、欧州西部、南アフリカ、インド、オーストラリア、中国、日本など、キタウラジロチチコグサに比べ広範囲に分布している。

両種の識別点について、高橋 (2020) は、葉の表面の毛、総苞片の形態、瘦果の色を示している。キタウラジロチチコグサは葉の表面は通常クモ毛が薄くある (図-1)。一方、ウラジロチチコグサでは、葉の表面は無毛かときに中肋沿いに細かなクモ毛があ



図-1 キタウラジロチチコグサの根生葉。表面にくも毛が密生する (6月上旬, 宮城県)。



図-2 ウラジロチチコグサの根生葉。表面の毛は少ない (6月上旬, 宮城県)。



図-3 キタウラジロチチコグサの総苞内片。長楕円形で先は鋭形から鋭尖形 (7月中旬, 宮城県)。



図-4 ウラジロチチコグサの総苞内片。線状長楕円形で先はやや横に丸く張り出してから微凸型に終わる (6月上旬, 宮城県)。

る(図-2)。総苞片は外片, 中片, 内片を通じてウラジロチチコグサのほうが幅広い傾向があり, 内片については, キタウラジロチチコグサでは先は鋭形から鋭尖形であるのに対し(図-3), ウラジロチチコグサは状長楕円形で先はやや横に丸く張り出してから微凸型に終わる(図-4)。瘦果の色はキタウラジロチチコグサでは紫色(図-5), ウラジロチチコグサは黄褐色である(図-6)。

幼植物～生育中期についても両種の形態の違いが観察される。両種とも子葉ははじめ広卵形で長さ1～2mm。第1, 2葉はほぼ同時に展開し, キタウラジロチチコグサの方がやや幅広く, 表面にくも毛が密生する(図-7, 図-8)。その後, 子葉はたてに長く伸び, 順次, 本葉が展開する。キタウラジロチチコグサは本葉の葉身基部が幅広く, 茎を取り巻くような形態(図-9)に対し, ウラジロチチコグサの葉身基部は茎に向かってくびれるように狭まる(図-10)。根生葉表面のくも毛の有無とあわせて, 葉身基部の形態の違いは生育期を通じて安定しているようで(図-11, 図-12, 図-13, 図-14), 葉身展開後に時間が経過し, 毛の有無が肉眼で判別しづらい段階でも識別点となりうる。

花序については, キタウラジロチチコグサは頭花の先端部が通常紅紫色を帯び, 花序内で頭花間にやや隙間が見られるのに対し, ウラジロチチコグサの頭花は黄褐色で, 花序内で頭花が密集した印象を受ける(図-15)。

既往の雑草図鑑類で“ウラジロチチコグサ”の生育過程の写真を掲載したのもでは, 「身近な雑草の芽生えハンドブック1改訂版」(浅井 2019) p75の写真5点はいずれもキタウラジロチチコグサである。「植調雑草大鑑」(浅井 2015)ではp129に「ウラジロチチコグサ」として掲載されている写真は, 上から4点はキタウラジロチチコグサ, 最下段の左(開花個体)はミナミウラジロチチコグサ, 最下段右(花序)はキタウラジロチチコグサ。瘦果の写真はキタウラジロチチコグサとミナミウラジロチチコグサの混在と思われる。

著者の観察した範囲(主に南東北, 関東)では, 両種ともに生育を認めており, しばしば同所に混生している(図-16)。両種の国内の分布範囲および生態的特性の差異について, 今後, 調査が進むことを期待したい。

引用文献

- 浅井元朗 2015. 植調雑草大鑑. pp. 129. 全国農村教育協会 東京.
浅井元朗 2019. 身近な雑草の芽生えハンドブック1 改訂版. pp. 75. 文一総合出版 東京.
GBIF <https://www.gbif.org/ja/>.
笠原安夫 1968. 日本雑草図説. p518. 養賢堂 東京.
沼田真・吉沢長人(編) 1975. 新版 日本原色雑草図鑑. p414 全国

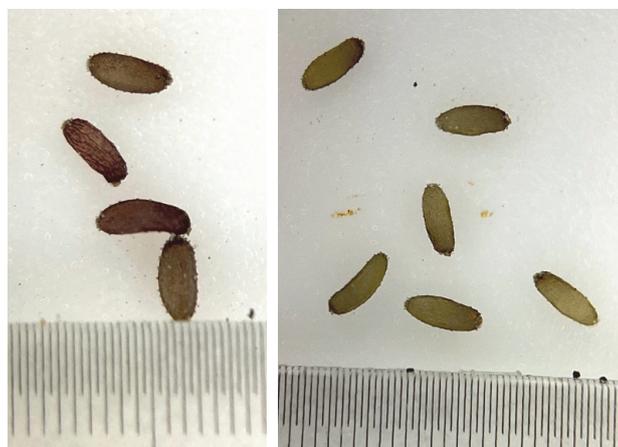


図-5 キタウラジロチチコグサの瘦果。紫色で長さ約0.4mm。
図-6 ウラジロチチコグサの瘦果。淡黄褐色で長さ約0.4mm。

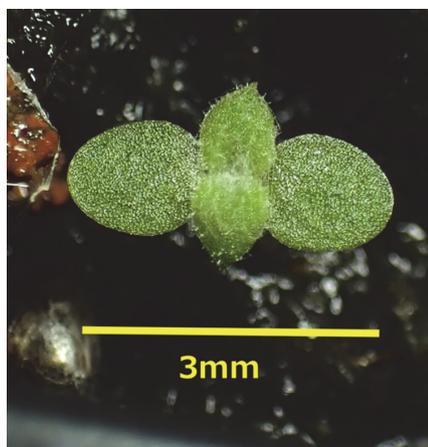


図-7 キタウラジロチチコグサの子葉と第1, 2葉。



図-8 ウラジロチチコグサの子葉と第1, 2葉。

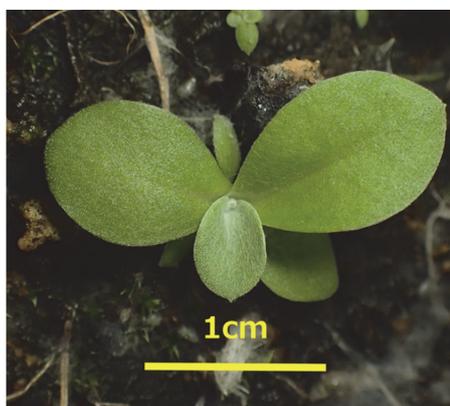


図-9 キタウラジロチチコグサの幼植物。



図-10 ウラジロチチコグサの幼植物

農村教育協会・東京・

Plants of the World Online <https://powo.science.kew.org>.

清水建美 2003. ウラジロチチコグサ. 日本の帰化植物 pp.223-224. 平凡社 東京.

高橋弘 2019. チチコグサモドキ属 *Gamochaeta* Wedd. 岐阜県植物誌調査会(編), 岐阜県植物誌 pp.790-791. 文一総合出版 東京.

高橋弘 2020. 岐阜県植物誌で用いたキタウラジロチチコグサとミナミウラジロチチコグサ (キク科チチコグサモドキ属). 植物地理・分類研究 68, 99-102.

米倉浩司・梶田忠 2003-. 「BG Plants 和名-学名インデックス」(YList), <http://ylist.info> (2025年1月14日).

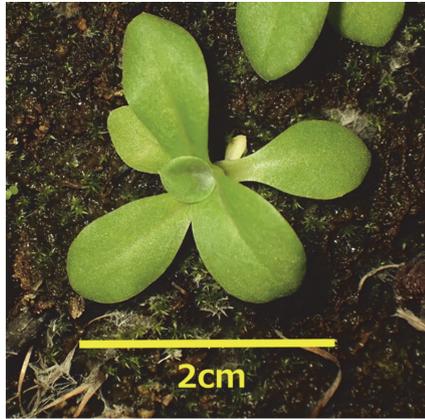


図-11 キタウラジロチチコグサの幼植物 (2)



図-12 ウラジロチチコグサの幼植物 (2)

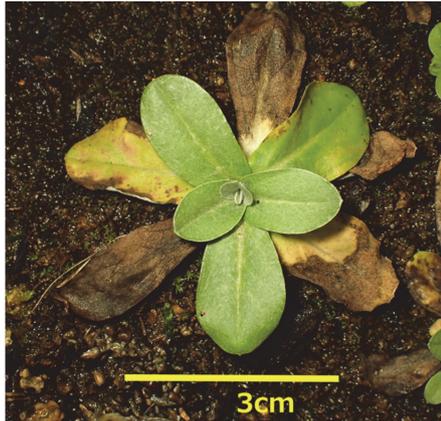


図-13 キタウラジロチチコグサの幼植物 (3)



図-14 ウラジロチチコグサの幼植物 (3)



図-15 キタウラジロチチコグサ (左) とウラジロチチコグサ (右) の花序



図-16 キタウラジロチチコグサ (右上矢印) とウラジロチチコグサ (2024年1月, 東京都江東区で撮影)